Vistas

KOBE COLLEGE NEWSLETTER

"Beauty Becomes a College"

33

2018•June

◉Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

◉文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」の深化

地域社会に貢献する
女性リーダーとして活躍するために

──女性のリーダーシップを育む 地域創りリーダー養成プログラム──

◉国際対話能力を育むグローバル・スタディーズコース
自分で考え、話し、行動できる国際人に──5
Marcelo FUKUSHIMA 准教授／Shawn BANASICK 教授／Yolanda Alfaro TSUDA 教授

スイーツで、多くの人に喜びと笑顔を──9
──ゼミでの学びを販売に生かして──
アンリ・シャルパンティエ アトレ吉祥寺店 セールスマネジャー　宮崎 千彬 さん

◉名塩和紙のよさをブックカバーにして伝える
「にしのみや学生ビジネスアイデアコンテスト」で《西宮商工会議所会頭賞を受賞》！──11

◉小さな興味を育むサポートを
「難民支援のボランティア活動」で《大島初枝記念賞を受賞》！──12

◉専門的関心を広げ、新たな知識欲を刺激する
「神戸女学院の100冊」書評コンテストで《優秀賞・学長特別賞を受賞》！──13

◉オーストリア・モーツァルテウム音楽大学とのフレンドシップウィークを開催
表現する歓びを問い直す──14

◉総合文化学科プロジェクト科目
「現地体験でしか見えないモノがある」──15
〈フィールドで学ぶ現代インドの諸問題〉

◉新学長に聞く──
日本最古の女子大学が向かう未来「NON SIBI」を身に纏う──17

KCインフォメーション──19

◉文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」の深化

地域社会に貢献する女性リーダーとして活躍するために

―女性のリーダーシップを育む 地域創りリーダー養成プログラム―

神戸女学院大学は、2011年度に全学部生を対象に開講した副専攻「地域創りリーダー養成プログラム」を、17年度より特色プログラムとして設置した。このプログラムでは、行政や企業、NPO法人などからゲスト講師を迎えて講義が行われ、履修学生は地域の問題や取り組みについて学んだ上で、グループに分かれて地域に住む人々を対象とした活動を自ら企画・運営する。始動から10年を迎えた17年度は、「門戸班」「防災班」「こども福祉班」「高齢者福祉班」の4グループが活動中。これまでの活動内容や成果、現状について、主担当教員の木村昌紀准教授と各班のリーダーである坂根さん、廣瀬さん、浜村さん、衣笠さんに話を聞いた。

●人間科学部 心理・行動科学科
木村 昌紀 准教授―― *KIMURA Masanori*

■学生自らが活動内容を考え、実施する

――改めて、地域創りリーダー養成プログラム設立の背景等をお聞かせください。

このプログラムは、2007～09年度文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」に採択された「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」を発展させたものです。11年度から学部を超えた副専攻プログラムとして開講されました。私の着任前ですが、人間科学部の先生達によって始動し、それ以来、心理学やサイエンス等、担当教員の専門分野の特徴も活かしながら、地域創りの活動が続いています。

――現在のプログラム概要をお聞かせください。

受講生は30名。2年生後期から4年生前期まで履修します。2年次の「地域活性化論」では、こども環境活動支援協会(LEAF)をはじめ、地域で実践活動を行う西宮市の防災啓発課、社会福祉協議会、門戸厄神地域活性化実行委員会等の団体からゲスト講師を招いてお話を伺い、学生はそれをヒントに、どのような活動をしていくかを考えます。地域創りの活動を行うための方法論やNPOの役割を学ぶ「NPOマネジメント論」もあり、それらの授業を受講してやりたい活動が変わったり、新たに思いついたりする学生もいます。

3年次の「地域活性化総合実習」では、全体での取り組みとして甲山農地での農業体験を行います。それと並行して各自の関心に基づいて複数のグループに分かれ、地域住民を対象とするイベントを企画。外部団体の協力のもと、実施します。

4年次はそれらの集大成となる振り返りとまとめの作業。「プレゼンテーション演習」にて、西宮市や関連地域の方々、高校生を対象に2年間の学習・実践の成果を発表します。

■農業を介し、多様な地域交流を

――開講当初から継続されている甲山農地での農業体験とは、どのような取り組みなのでしょう?

自然に触れ、地域の人々と関わりながら、環境や食育、エコ、運動等について考えていく活動で、当初からLEAFの協力を得ています。小規模からのスタートでしたが、年々地域との繋がりは深まり、連携先も広がりました。

17年度の具体的な活動としては、5月に田植え、10月に稲刈りをしました。また、大学祭では模擬店を出店。自分たちが甲山農地で栽培した米やサツマイモ、玉ネギ、ナス、ニンジンと、門戸厄神の朝市で販売されているホウレン草を使ったカレーと、防災の観点から女学院で備蓄している非常食のビスケットで、賞味期限の近いものを活用・アレンジしたデザートを提供しました。2日間で400食を完売。投票では見事、模擬店のグランプリを戴くほどの盛況ぶりでしたよ。

その他、16年度からの試験的な取り組みとして、校章入りのKCナスを栽培するプロジェクトも進めています。販売するまでの生産数には至っていませんが、こちらも大学祭でお披露目し、よい反応を得ることができました。

●西宮市・甲山農地で行われた田植え実習

担当教員の木村准教授とプログラムに取り組んだ4グループのリーダーたち

――履修生全体で取り組む意義とは?

グループでの活動は、「門戸班」「防災班」「こども福祉班」「高齢者福祉班」と、4テーマに分かれて行っていますが、そもそもそれらは独立したものではなく、一体となっているのが〝地域〟。農業や大学祭を通じて、テーマを超えて皆で協力した全体の活動は、地域を考える上で重要な体験になったと思います。野菜をご提供いただいた農家の方からは「使ってもらえて嬉しかった」と言っていただけました。また、活動に関わる地域の方々が大学祭にも足を運んでくださり、実際に食べて「美味しかったですよ!」というお声がけも。活動を介して多様な交流が生まれており、改めて地域の皆さんに支えられている授業だと強く感じます。

■受け継ぎ、発展させ、創生する

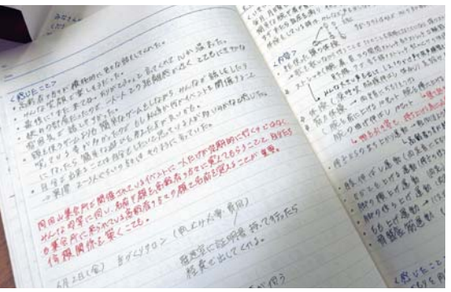
――今後の展望をお聞かせください。

このプロジェクトでは、主担当教員が地域創りを専門にしている訳ではなく、教員も学生と共に試行錯誤しながら取り組むという稀な形式となっています。地域活性化に完全な解決法はなく、私自身も学ぶこと、チャレンジすることが多く、支えてくれるスタッフの力もとても大きいと感じています。そして、現在の活動は、これまでに地域と築いてきた信頼関係があるからこそのもの。今後も、後輩達へと引き継がれ、発展していくことを願っています。一方で、学生自らがやりたいと思うこと、新しいアイデアが出てきた際は、それもやってみようと言える環境を整え、学生、教員、スタッフ、地域の皆で新たな展開を考えたいですね。

リーダー養成というと、皆をぐいぐい引っ張っていく力を付けるイメージがあり、もちろんそれも大切なことですが、リーダーにも様々なタイプがいて、メンバー同士を調整する役割もあります。また、リーダーにならなくても、リーダーを上手に支えるフォロワーシップも重要。これは私の考えですが、今後は、リーダーはもちろん、人との関わりの中で様々な役割を見つけ、行動できる人材を養うプログラムであり続ければと思います。

――最後に、学生へアドバイスを。

地域創りの活動は、この授業と共に終了するものではなく、社会人になり、会社や地域、家族等と関わる中でずっと続いていきます。この授業で得た達成感や満足感だけで納得せず、悔しさや後悔、失敗なども込みで今後に生かしてください。



●活動で得た気づきや今後の改善点が記されたノート

▶ Information ―― 7/29(日)午後、オープンキャンパスで報告会を開催します。一般公開で行いますので興味のある方は是非ご参加ください!

―女性のリーダーシップを育む　地域創りリーダー養成プログラム―

門戸班

目的 門戸厄神駅周辺の飲食店の活性化

主な活動内容
◉門戸厄神駅周辺の店舗を取材し、女学院生に向けてSNSやWebsiteで紹介。
◉17年12月、学内で参加者を募り、地域の飲食店を巡るツアーを開催。
◉18年1月、学内にて試食しながら飲食店を紹介するイベントを開催。

●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科3年生
坂根 さん

――どのようなツアーを企画したのですか？

「てくてく隊と行く素敵なお店発見ツアー」と称し、私達が〝門戸コレクション〟に認定した地域の飲食店5・6店へ、昼と夜の2回に分けて女学院生を案内しました。ツアー後には一つのお店に各店の人気メニューを集め、皆で試食。協賛店にはロゴマークも貼ってもらったのですが、皆快く受けてくださり、地域の温かさを感じました。

――大変だったことは？

メンバー9人の学科や専門が異なり、時間割が合わず、顔を合わせた情報共有が難しかったです。それと、私は「これでいいや」と自己完結してしまうところがあるのですが、スタッフの方から様々なアドバイスをもらい、やるべきことがまだあることに気付いてギリギリに。パンフレットやウェルカムボード作りなど、イベント前日まで先生やスタッフの方に助けてもらうことになり、計画性のなさを反省しました。

――その後の学内イベントはいかがでしたか？

各飲食店にご協力いただき、学内にブースを作ってビュッフェ式でお店の味を楽しんでもらいました。無料ということもあり、想像を上回る80名もの学生が参加してくれ、SNSのフォロワー数も一気に伸びました。イベント用に作成した紹介パンフレットがお店の方にも好評で、増刷して配布することになったのも嬉しかったです。

――後輩へのメッセージをお願いします。

私達は先輩の活動を引き継ぎつつ、自分たちのオリジナリティとして門戸コレクションとSNSへの掲載を考えました。他にも門戸厄神を活性化する方法はあると思うので、違う方面からのアプローチもして欲しいです。

学内で実施した試食会▶

◀地域の飲食店を紹介したパンフレット

防災班

目的 子ども達への防災教育

主な活動内容
◉17年8月、名古屋市港防災センターからの依頼を受け、防災ウォッチをメインに名古屋市防災展をプロデュース。学生による企画コーナーも担当。
◉17年11月、子ども連れの家族と共に、駅から大学までの危険な場所を見て回り、ハザードマップを作成。避難生活の体験学習も実施。
◉子ども達に防災を学んでもらうための紙芝居を作成中。

●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科3年生
廣瀬 さん

――名古屋市防災展の企画依頼を受けた経緯を教えてください。

先輩達が考案した、子ども達にゲーム感覚で防災を教える〝防災ウォッチ〟の取り組みが、16年度の「ぼうさい甲子園」で奨励賞を受賞したことから、名古屋市港防災センターの方が気に入ってくださり、お声がけをいただきました。全体のプロデュースに加えて、担当ブースでオリジナルの防災ウォッチヒーローショーを開催し、地震が起きた時にどんなお助け妖怪を使って身を守るのかなど、楽しみながら学んでもらえる内容にしました。準備期間が3カ月程しかない中で、意見がたくさん出過ぎて、シナリオを考えるのが大変でした。

――反響はいかがでしたか？

2日間のイベント全体で1258人もの来場があり、私達のコーナーにも120人以上の子ども達が来てくれました。すごく盛り上がってくれ、ショー後に行った小テストはほぼ100%の正解率。保護者アンケートでは「防災を学ぶきっかけになった」「わかりやすく学べた」等のお声をいただき、達成感や自信に繋がりました。

――活動から得たことは？

防災展の後、自分達で防災イベントを開催したのですが、思うように集客できなくて。イベント開催の難しさを学んだと同時に、たくさんの人に防災の知識を得てもらうという役割を果たせていないと感じ、今後も活動を続ける選択に至りました。今は紙芝居を作り、西宮市の小学校の防災訓練で読み聞かせを行う準備をしています。

――後輩へのメッセージをお願いします。

先輩達から続く〝防災ウォッチ〟の活動や、私達が制作している紙芝居も引き継ぎながら、オリジナルなものも作って欲しいです。うまくバトンタッチしていけるといいですね。

▲たくさんの子ども達が参加した「名古屋市防災展」

▼ハザードマップの作成

▲手作りの防災紙芝居

こども福祉班

目的 貧困家庭、不登校の子ども達の支援

主な活動内容
◉17年12月、子ども達とイベントを企画・準備・実行し、楽しい思い出を作ると共に、自己肯定感を高めてもらうことを意図し、"食"と"学び"をテーマとするパーティを実施。
◉18年2月、神戸女学院大学1日体験を開催。英語と生物の授業体験やキャンパスツアーを実施。

●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科3年生
浜村 さん

――イベントで、子ども達に伝えたかったことは？

「子ども達の視野を広げること」を目標にしました。金銭的な問題で進学を諦めている子、いじめを体験して学校や人と関わることが嫌になっている子などに「学校以外にもいろんな世界があるんだよ」と伝えたかったんです。昨年12月には、自分に自信を持ってもらうため、料理や勉強を通して頑張ったことを褒め合う〝頑張ったねパーティ〟を企画。食部門では子ども達が好きなシチューとナポリタン、食パンを使ったケーキ作りをし、後で振り返ることができるよう、ひとり一人のよいところを私達が観察して紙に書き、色紙に貼って渡しました。学び部門では、子ども達にも身近なSNSを取り上げ、私達の物事の捉え方の偏りに気づき、メディアの情報を鵜呑みにせず、複数の情報源から考えることの大切さを伝えました。メンバーの中には心理学や社会学を専門としている人もいるので、それらをうまく織り交ぜた内容になったと思います。

▲"頑張ったねパーティー"

――1日体験の反響は？

子ども達を女学院へ招き、メンバーそれぞれの専門分野を生かして、英語と生物の授業を行いました。英語以前にローマ字も書けない子がいたので不安でしたが、後でアンケートを見たら、皆楽しんでくれたことが伝わってきてよかったです。イベント中、「もっと学校に行っておけばよかった」と言っていたのが心に刺さりました。

――活動から得たことは？

相手のことを考えて行動することの大切さを学びました。私は発表のためのPowerPoint作りなど、様々なことを一人でやってしまい、メンバーに怒られました。皆で一緒に作ると不備も見つけやすいけれど、他の人が一人で作ったものは悪いところが見えにくく指摘もしにくい。実際、発表の時は誤字脱字があったのに、誰も気付かず、修正できなかったんです。皆と本音で話をし、価値観も変わってきた気がします。

高齢者福祉班

目的 岡田山集合住宅周辺の高齢者との交流促進と継続的支援

主な活動内容
◉17年9月、甲山農地で栽培した大麦を使った麦茶作り。
◉17年10月、ハロウィンをテーマに、仮装マスク作りやチーム対抗ゲームを開催。
◉17年11月、甲山農地で栽培したさつまいもを使ってお餅やご飯作りを実施。
◉17年12月、学内のクラブの協力を得て、クリスマスパーティを開催。

●文学部総合文化学科3年生
衣笠 さん

――活動の目標と印象に残ったイベントは？

前期は、集会所へ通って高齢者の方との親睦を深めることを、後期は、月1回イベントを開催し、高齢者同士の繋がりを強化すること、後輩への広報活動を目標にしました。

印象深かったのは、11月の甲山農地のサツマイモを使ったお料理作り。懐かしんでもらえそうなメニューをと、芋餅やおにぎりなどの準備をし、当日は役割カードを作って班ごとに作業。難しいかなと思ったけれど、高齢者の方はおにぎりを握るのも上手で、お米を炊くときに昆布を一緒に入れると美味しいなど、教えてもらうことの方が多かったです。ご自身の役割を見つけてもらえたことも大きかったですね。

――大変だったことは？

後輩への広報活動です。10月から12月のイベントでは、チラシを作成して地域創りリーダー養成プログラムを受講している2年生へ参加の呼びかけを行ったのですが、反応はなく、どうしたら興味を持ってもらえるのかと試行錯誤しました。そこで、私達が行っている活動内容をまとめ、文化部に絞ってメールを送ったところ、12月のクリスマス会にはクラシックギター部、K.C.Press、写真部、美術部が参加してくれました。部活との新しい関係が作れ、高齢者の方も喜んでくれてよかったです。また、部活動と連携できた点で全体目標として掲げていた継続的支援に少し近づいたと思いました。

今は後輩のために、集会所に来てくれる高齢者の方達の特徴を書いたワードのシートを作成中。「楽しいのでまた来たい」と言ってくださる方が多いので、この活動を引き継いで欲しいです。

――活動を経験し、自身の変化を感じますか？

このプログラムに参加するまでは、私は皆を引っ張っていくような性格ではないと思っていましたが、活動を通して「自分が引っ張っていかないと」と思うようになりました。グループでの活動は大変ですが、自分の成長にも繋がる。社会に出ても、それぞれの個性を尊重しながら意見を言い合える関係性を築き、誰かを引っ張っていける人材になりたいです。

高齢者の方と一緒に作った芋餅とおにぎり▶

▼クリスマス会

●国際対話能力を育むグローバル・スタディーズコース

自分で考え、話し、行動できる国際人に

神戸女学院大学英文学科は2001年度、多分野にわたるトピックスを取り上げ、実践的な英語力と考える力を養成するグローバル・スタディーズコース（2009年度までの名称は「グローバル・コミュニケーションコース」）を設けた。授業は全て英語で行われ、学生は社会問題への関心を通して、日本と英語圏とを比較。自分の意見を表現し考えを発展させ、議論を深める方法や技術を身につけていく。開設17年目となる18年度からは、履修開始をこれまでの2年生から1年生に改変。代表のFUKUSHIMA准教授に、コース設立の背景やカリキュラム内容を聞くと共に、国際関係論のBANASICK教授、移民学・女性学のTSUDA教授、国際ビジネスのFUKUSHIMA准教授に、それぞれの教育分野について話を聞いた。

◎インタビュー

— Marcelo FUKUSHIMA 准教授

■英語で専門分野を教え、国内外で活躍できる人材を育成する

——改めて、グローバル・スタディーズコース設立の背景や目的をお聞かせください。

世の中は激変を続けており、日本の社会も経済も急速に国際化が進んで、英語を話せるだけでなく、英語で議論することのできる高度なグローバルリテラシー（国際対話力）や国際理解力が求められるようになりました。そうした背景から、グローバル・スタディーズコースは、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」様々なことを深く広く学び、分析する力を養うことを目的に設立されました。

——どのようなカリキュラムなのでしょう？

担当する外国人教員は皆、語学を専門としておらず、授業では国際関係、女性学、移民学、メディア学、国際ビジネスと、それぞれの専門分野を英語で教えます。英文学科内でも教員のほとんどが外国人というのは当コースだけであり、異なる地域から集結しているのは全国の大学でも珍しいことです。

特徴的なのは、学生自らが課題を設定し、自分で研究していくアクティブラーニングの積極的な導入。学生は本やカッションすると共に、フィールドワークで実際に取材へ出たり、海外で異文化に触れたりと、ワンアクションの機会を与えられることで自らの考えを構築できるようになります。

また、クリティカルシンキング（批判的思考）を養うこともこのコースの一つの柱。世の中には情報が溢れ、フェイクニュースも増えています。21世紀の諸問題を、翻訳を通さず英語で学び、疑いを持ちながら自分の頭で考え、読み解き、意見をプレゼンテーションする力を磨いていきます。

——当コースの果たすべき役割とは？

グローバルに活躍できる人材を育成することです。そのために求められる能力は、大きく分けて3つあります。

一つ目は、コミュニケーション能力。英語だけではなく、その場に必要な言語や表現を扱える力です。会話することや文章にできることも重要ですが、現代社会ではメディアや動画等を用いた新しい表現方法も求められます。

二つ目は、国際社会に関する知識力。地理学や社会問題、政治経済など、世界で通用するスタンダードな知識が必要です。

三つ目は、異文化を理解する力。各国の文化の違いや日本について、深く知っておかねばなりません。

——それらの能力を習得できているかが、評価に繋がるのですね。

そうです。やはり最も重視するのは卒業論文。いかに創造性を働かせ、的確な問題分析を行い、習得した学びやテクニックを反映しているかを評価します。かつて、規定ページ数は20ページでしたが、現在は上限を設けておらず、100ページもの大作を書き上げる学生もいます。また、別の選択肢として、13年度より、動画制作やボランティア活動の報告等のプロジェクトも評価基準に加わりました。

——今年度より、履修開始が1年生からとなりました。その意義とは？

改変により、1年生は基礎知識としてグローバル・スタディーズ全般を学び、2年生から専門分野を選択できるようになりました。常々、卒論にかけられる時間が足りないと感じていましたが、これからはより早く専門知識を習得し、じっくりと取り組めるようになるでしょう。

■Marcelo FUKUSHIMA
神戸女学院大学文学部英文学科准教授　グローバル・スタディーズコース担当。ブラジル出身。国際ビジネスと経済学を担当し、国際ビジネスのあり方と国際社会問題との関係、日本経済の将来、世界文化などを扱う。

「グローバル・スタディーズコースは、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」様々なことを深く広く学び、分析する力を養う」

◎国際関係論
— Shawn BANASICK 教授

■先端の教育テクノロジーを用い、楽しみながら国際理解力を磨く

◇iPadやYouTubeを駆使した授業

私は地理学と定量的研究、教育工学を専門とし、神戸女学院大学に来る前の9年間はアメリカの大学で教えていました。グローバル・スタディーズコースでは、国際関係論と地理学を融合させ、平和と紛争をテーマに、テロ事件や沖縄問題等、実際の問題を取り上げて国際問題を考える能力を養う授業を行っています。

教室では全員がiPadを使用。タブレット端末の導入は、アメリカでは早くから行われています。全員の考えを直ぐに見ることができ、発言するのが苦手な学生も、入力によって気軽に参加し、活発に意見交換できるのがよいですね。

また、反転授業のスタイルを導入していることも特徴の一つです。独自の授業プログラムを組んで、YouTubeで配信。学生はこの動画フィルムを見て予習をしてから授業に臨みます。つまり、授業は復習や応用の場であり、予習で得た知識をもとにディスカッションや質疑応答を行うのです。高校卒業までの暗記を中心とする学習とは違い、自分で物事を考え、意見を発表するよう意識を変えなければならないため、1年生は大変でしょう。でも、慣れてくると学生も盛り上がり、授業はとても活性化します。唯一の難点は、私の準備が大変ということですよ(笑)。

◇習得した技術を用いての卒論制作

こうした授業を経て、学生は世界の貧困と不平等について、マイクロソフトエクセルを使って人間開発指数を分析したり、自分でデータからグラフや地図を製作したりできるようになります。卒論は、それらのテクニックを上手に使い、的確に情報分析しているか等を評価。過去のユニークなプロジェクトとしては、自らの会社設立を想定した会社案内パンフレットの制作や、有機農業に関わる様々な人へのインタビューをまとめた本作り、ドキュメンタリー動画の制作などがあります。

年々、ハイレベルな内容になっており、私も楽しみにしているのです。

◇学びの姿勢を持ち続ける人間に

私が目指すのは、独学できる人間を育てること。学生には、卒業後も世の中の動きや出来事、社会問題に関心を寄せ、生涯学ぶ姿勢を持ち続け、自信を持って英語を話す人になって欲しいと願っています。また、これからの学生には、例えば、シリアの内戦をテーマにアプリを作るなど、アクティブラーニングとしてソフトやアプリ制作にも力を入れて欲しいですね。そして、それを学外へ向けてプレゼンするなど、各自がクリエイターとしても育っていくことを望みます。

◎移民学・女性学（ジェンダー研究）
— Yolanda Alfaro TSUDA 教授

■フィールドスタディで、女性や移民の問題を肌で感じる

◇実感の伴った体験を

私の専門はジェンダー及び移民研究です。2003年に着任し、今年で15年。授業は学生を国内外の様々なエリアへ引率するフィールドスタディを柱としています。

移民問題をテーマに、訪れたのはアイルランド。なぜアイルランド人は移民を送り出したのか？ 歴史的背景を学び、移民先のボストンへも足を運びます。また、ポーランド訪問も恒例です。ホロコーストを経験した国にも関わらず、なぜ難民や移民に反対しているのか？ を考えます。

一方、女性問題をテーマに、ニューヨークの国連本部でのWorld Conference on Women（世界女性会議）や、世界各国の政府や民間女性リーダー1000人以上が集うGlobal Summit of Women（GSW）等にも参加しています。そういった国際イベントに学生を引率したのは私が初めてであり、女学院生の参加は世界中の方々から歓迎されています。

こうしたGSW等の国際会議に参加した学生は、グローバル世界のリアルな声に触れ、例えばFUKUSHIMA先生の授業で学ぶビジネスの知識に実感を伴わせます。また、国境問題が話題に上ると、BANASICK先生の授業で取り上げられた紛争についての知識が役に立ちます。グローバル・スタディーズコースは専門の異なる教員が集まっていますが、実は共通項も多く、相互作用で学びを深めていくことができるのです。

その他、私の母国フィリピンの提携校にもご協力いただいています。フィリピンは開発途上国ですがジェンダー・ギャップ指数（GGI）が世界のTOP10に入っています。逆に、恵まれているはずの日本はイエメンと同等の114位。そのパラドックスについて考えます。

◇国際的に活躍できる人材を育成

日本を知り同時に、学生には国際的な人間になって欲しいです。フィールドワークで多文化理解が身につけば、海外で働くことも難しくありません。ゼミ卒業生の中には、イタリアへ移住した人々に興味を抱き、自身もイタリアに渡って現地採用された人や、GSWで堂々と挨拶して意見を述べたことから、名刺交換した社長の企業に採用された人もいます。

◇日本の移民問題や国内活動も

今後は、日本の移民問題にも注目したいです。今年はハワイ日系移民150周年。明治時代に日本からの移民がハワイに到着したことはあまり知られておらず、歴史を知るためにも、学生と共に記念行事へ出席したいと考えています。

その他、国連国際移住機関（IOM）東京オフィススタッフにお会いする機会を設けるなど、学生を引率したい場は尽きません。加えて、フィリピンの貧困地域で暮らす子ども達にファッションショーを経験してもらう「DEAR ME」の活動。これは学生自らが企画、運営し、今年で開催5回目となります。

今後、神戸女学院を会場として展開することなども考えていきたいです。

◎国際ビジネス
— Marcelo FUKUSHIMA 准教授

■産業の構造や流通システムを学び、自らも商品開発に挑戦する

◇身近な切り口から興味を引き出す

私の専門は国際ビジネスです。授業では、国際情勢が国内外ビジネスに与える影響を学び、日常生活との関わりについて英語でリサーチやディスカッションをします。英文学科のコースですから、学生はビジネスにそれほど興味がありません。そのため、ファッションや観光等の身近なトピックを入り口とし、ビジネスの面白さをどのように伝えていくかが課題です。例えば、ファストファッションはなぜ安く大量に生産できるのか？ 産業の構造から店頭に並ぶまでの流通システムを解説し、普段、私達が訪れている店舗の背後に興味を持つよう導きます。

◇多様な職業を知るきっかけに

この授業のよい点は、産業の構造や成り立ちを知るだけでなく、職種の紹介にもなるということです。ファッション好きの学生が産業そのものに興味を持ったり、旅行好きの学生が観光業界に関心を持ち、将来こういう企業で働きたい、こんな旅行会社を作りたいと、自分の目指す道を決めたり。特に、女学院にはエアラインに興味のある学生が多く、その大半はCA志望です。エアラインにはマネジメント業務等もあることを知ると、視野は広がり、就職活動の際にも役立ちます。

問題は、ビジネスの分野は多岐に渡るため、授業という限られた時間の中では表面的なところまでしか教えられないこと。金融等について学びたい学生もおり、実際、証券会社に就職する学生も多いのですが、金融危機や株式の仕組み等を深く知るには1、2年かかります。解説できるのは業界の仕組みまでで、後は自力で深めていかねばなりません。また、国際会計士等を目指す学生から、就職相談を受けることもあります。こちらは勉強法や資格、企業についてなど、必要なことを本人と一緒に調べながら進めています。

◇商品開発のノウハウを習得する

これまでは3年生、今年から2年生でグループ別に商品開発を行うビジネスプロジェクトの授業が始まります。

マーケティングの基本を学び、市場調査やアンケート調査、CM制作など、開発から広告まで一連のプロセスを経験するという内容です。架空のプロジェクトではありますが、まだ世の中に存在しないサービスを考えることで創造性が養われ、グループで活動することにより人間関係の学びにも繋がる。企業に入ってからも求められる様々な能力が身につきます。

ビジネスは理論よりも実践の方が大切。今後は日系企業の訪問等も行い、学生に企業の細部を実感してもらいたいですね。また、昔から温めているのが、学内での学生起業プロジェクト。

学生が開発したアプリや、フェアトレードを取り入れたファッションなどを扱うことができれば面白いのではないでしょうか。

■Yolanda Alfaro TSUDA
神戸女学院大学文学部英文学科教授 グローバル・スタディーズコース担当。フィリピン出身。フィリピン国立大学大学院、ハーバード大学院修了後、アメリカで就職、2003年より現職。移民学・女性学（ジェンダー研究）を担当し、移住や難民の課題、戦争と平和におけるジェンダーの問題などを扱う。

「日本を知り、同時に学生には国際的な人間になって欲しい。フィールドワークで多文化理解が身につけば、海外で働くことも難しくありません」

■Shawn BANASICK
神戸女学院大学文学部英文学科教授 グローバル・スタディーズコース担当。アメリカ合衆国出身。アメリカの大学で9年間教鞭を執り、2010年より現職。専攻は地理学。国際関係論を担当し、様々な国際問題の原因分析、紛争解決の方法、紛争の仲裁とコミュニケーションの問題などを扱う。

「私が目指すのは、独学できる人間を育てること。生涯学ぶ姿勢を持ち続け、自信を持って英語を話す人になって欲しい」

スイーツで、多くの人に喜びと笑顔を

──ゼミでの学びを販売に生かして──

●アンリ・シャルパンティエ アトレ吉祥寺店 セールスマネジャー
宮崎 千彬 さん── *MIYAZAKI Chiaki*

スイーツは、なくても生きていける。
けれど、世界中で必要とされているのだから、存在意義がある──。
関西では知らない人はいないであろう洋菓子ブランド、アンリ・シャルパンティエ。
その魅力をより多くの人に広めたいと、東京勤務を志願した宮崎千彬さん。
「いつも与えられた以上の仕事をするよう心がけています」。
学生時代にゼミで学んだ統計学や心理学を生かしながら、
アトレ吉祥寺店の店長として販売管理やスタッフの育成に力を注ぐ。

■**宮崎千彬**(みやざき・ちあき)
2011年人間科学部 心理・行動科学科卒業。同4月、株式会社クリエイト・レストランツ・ホールディングスへ入社。転職し、12年に株式会社シュゼットへ入社。15年より社員登用され、新宿伊勢丹店など百貨店や大型商業施設で販売や管理、スタッフの育成に携わる。千葉そごう店店長、人事部を経て、現在、アトレ吉祥寺店店長。

◉人を笑顔にする商品を扱う喜び

「目の前のお客様を喜ばせ、笑顔にできるスイーツを広められることが嬉しい」。華やかなフィナンシェで名高い洋菓子ブランド『アンリ・シャルパンティエ』。そのアトレ吉祥寺店で店長を務める宮崎さんが販売の楽しさに目覚めたのは、大学2年生で始めた同・西宮阪急店でのアルバイトだった。何事も真摯に取り組む宮崎さんは、頼られる存在になりたいと、率先して接客をし、休憩時間はノートに熨斗紙の表書きを練習。帰宅後もタイムを計りながら包装やリボンかけの練習を繰り返した。「今思えば、なんでそこまで出来たのか」と笑う。

◉ゼミでの学びを実践に

宮崎さんが目指すのは、お客様が「また行きたい」と思う暖かい雰囲気の店作り。「店舗って本当に面白いんです。一人で頑張ってもだめで、皆が協力して初めてよい雰囲気になる。だから、常にチームワークを考えています」。売りたい商品をお客様へどのように勧めるか、お声掛けの仕方や商品の陳列方法をスタッフひとり一人に口頭でレクチャー。一丸となって販売する。「売り上げが伸びた日は、やったー!」と、皆で大喜びですよ」。

やりがいを感じるのは、過去の自社データから売れ筋を予測し、商品を仕入れ、売り上げに繋がった時。「読みが当たると、よしっ!と(笑)。データ閲覧回数は社内トップに近いですね。データから仮説を立て、実際に行動し、結果を見て改善し……その繰り返し。ゼミの統計学でずっとデータ分析をしていたことが、販売管理にとても役立っています」。

もともと人間の行動に興味があり心理・行動科学科へ進学した宮崎さん。売り場には、ゼミで学んだ様々な心理が隠されていて面白いという。例えば、繰り返し接触すると好感度が高まる単純接触効果。実際に売りたい商品を様々な場所へ設置してみると、本当にその商品はよく売れた。「セオリー通りですごいなと思いながら、お客様の動向を見ています」。学んだセオリーを実践しつつ、研究も怠らない。休日は他店舗の視察や他社の新作チェックのため、百貨店等へ足を運ぶ。「スイーツも百貨店へ行くことも大好きなんです」と、楽しみながら吸収していく様子は清々しい。

宮崎さんの卒業論文「贈り物の付加価値における自己感の影響」。アンリ・シャルパンティエでのアルバイト経験を生かし、相手との親密度合いによって贈り物の内容や価格帯が変わることをデータで証明した。学内で2回の大規模アンケートを実施し、全学年179名の協力を得た力作。

◉理想の接客スタイルを求めて

いつも笑顔で働く宮崎さんだが、葛藤を抱いていた時期もある。大学卒業後は、食に携わりたいと様々な業態の飲食店を展開する企業に就職。経験値は上がったが、「自分のやりたい接客スタイルは本当にこれだったかな?」という思いが消えなかった。心に浮かぶのはアンリ・シャルパンティエの接客。またあの店舗で働きたいと、意を決して転職し、運よく空いたフリーター枠で採用された。

もちろん、最初は大変なことも。「アルバイト時代と同じように真っ先に接客へ行き、怒られました」。お客様の元へ最初に伺うのはアルバイト。フリーターや社員には電話応対や商品管理、配送等の業務もあり、先に接客へ行くと売り場が回らなくなり、お客様をお待たせしてしまうことになる。それならもう一人のフリーターさんの行動を完全にコピーしようと、全てを書いて覚え、その人よりも早く動いて仕事を習得していった。

◉自身の役割を考え、行動する

宮崎さんは3年のフリーター勤務を経て念願の正社員に登用され、関東最大規模の新宿伊勢丹店へ赴任した。さらに数回の異動を経て、1年半後には千葉そごう店店長に。めまぐるしい環境の変化、さぞ大変だったのでは?と問うと「さらに大きな店舗を任されてみたいと思っていました」と、とても前向き。常に自身の役割を考えて行動する姿勢は、どこの配属になっても変わることなく、一般社員の時は、店長とフリーター、アルバイトのパイプ役となって皆が働きやすい環境作りを徹底。店長になってからは、販売管理のデータ分析やアルバイトの育成に取り組んだという。

その後の急な人事部への異動にはさすがに驚いたというが、それも経験できてよかったと言い切る。「店舗ではお客様にどう瞬時に対応するかなど、目の前のことに専念していましたが、人事部で研修を担当し、業界全体の通年の流れを掴むことができました」。アルバイトの教育や社員カリキュラムのブラッシュアップ等に携わり、年間スケジュールの立て方や段取りの大切さを学んだことは、店舗に戻った今、イベント戦略を立てたりスタッフを指導したりする上で大いに役立っている。

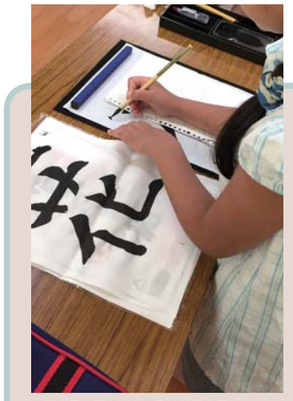
◉教育を担い、自らも向上

目下、宮崎さんが注力しているのはアルバイトの教育。「厳しく指導するので最初は嫌がられますが、社会人になった後、ここでバイトしておいてよかったと思ってもらえるよう、社会で通用するレベルにまで育てる心持ちです」。

販売や運営に関わる様々な業務を視野に、いつかは本社勤務をという願望もある。「本社は全店の問題を解決できるので。店舗支援の部署などを経験してみたいですね」。また、再度、人事部の仕事にもトライしたいという。以前は研修カリキュラムの作成途中で異動したため、実施し、結果を検証するところまで手掛けたいのだ。「アンリ・シャルパンティエでの仕事は変わらずずっと好きだと思う。やりたいことが沢山あるので、可能な限り続けていきたいです」。

COLUMN　私はまだ、私を知らない。

私が今、一番興味を持っているのは教育に関すること。どうすればスタッフのやる気を高めることができるのか? ちょっとした言葉のかけ方ひとつで違うと思うんです。それぞれの個性を上手に引き出し、ステップアップさせることが出来るようになりたいですね。その方法を習得するため、日々、様々な人と話し経験して勉強を重ねていきます。


習字で日本語を練習するシリアの子どもたち

SUPPORT

「難民支援のボランティア活動」で《大島初枝記念賞を受賞》！

◉小さな興味を育むサポートを

兵庫県に住むシリア難民の子どもたちにボランティアで日本語を教えるアマル教室プロジェクト。現在、教室には公立小学校に通うシリアの子ども９人が通っており、月２回の日本語学習教室や月１回の学外活動等が実施されている。幼い頃から「困っている人の力になりたい」との思いが強かったという三尾さんは、約１年前からこのプロジェクトに参加。学外活動ユニットに所属し、「子どもたちに何を学んで欲しいか」を重視しながら毎月の学外活動を企画する。実際の活動や大島初枝記念賞受賞の歓びなど、話を聞いた。

●文学部英文学科2年生
三尾 さん

《大島初枝記念賞とは》
神戸女学院の第40回高等部・第43回大学部卒業生であり、戦後初の同窓会長を務めた大島初枝氏の志を、「国際ボランティア活動」の推進に活用した記念賞。国際ボランティア活動(国内での各種活動を含む)に参加した学生を対象としている。

―活動に参加したきっかけは？

女学院の人権論の授業で、難民支援に携わっている先生から話を聞き、ニュース等から得た情報と現状にギャップを感じたのがきっかけです。それまで私は、日本は難民認定数が少ないので、外国から来ている人も少ないと思っていました。でも実際は、認定されず行く場所がないまま滞在している人が多くいる。昨年の申請者数は1万9600人を超えるのに、認定されたのはたった20人です。難民問題への関心が深まり、女学院の先生に連絡してシリア難民の方達とのコーヒーパーティに呼んでいただき、その繋がりからアマル教室プロジェクトに参加しました。

―やってよかったと思うことは？

私は校外学習の企画や運営を担当しています。子ども達にはその体験から「自分はどんなことに興味が湧くのか」を発見し、アイデンティティを見つけていって欲しい。そう思っていたら、科学館の見学で学んだ遠心力や歯車の動き方などを参考に、工夫を凝らして貯金箱を作り、夏休みの工作として提出した子が現れました。また、お箸作り体験から、自分に細かな絵を描く才能があると気付いた子も。お父さんとお母さんもすごく褒めてくれたと喜んでいた顔が忘れられず、大変だったけれど企画した甲斐があったなと嬉しかったです。

―新たな発見等はありましたか？

料理のレシピには、助動詞や接続詞など日本語学習的な要素が盛り込まれているからと、日本語教師の方からアドバイスを受け、お菓子作り体験を企画したことがあります。そこで自分の好きなポテトサラダを提案したら、皆が賛成してくれ、実際に子ども達もジャガイモだらけになりながら楽しんで作ってくれました。こんな些細な思い付きを言うのは恥ずかしかったのですが、発信してみることの大切さを学んだ気がします。

また、お母さん達との交流から、シリア人のフレンドリーさや料理上手なこと等を知りました。お母さん達は、私たちが教室へ行くたびに「今日も来てくれてありがとう！」と言ってくれます。日本語は上手くないけれど、その言葉を聞くと「違う背景の中に共通するものがある」と感じます。料理は、ケバブやモロヘイヤスープなど、現地のメニューをご馳走してもらったのですが、もの凄く美味しくてびっくりしました。

―そうした様々な経験を発表し、受賞した感想は？

受賞により1年間の活動に対する実感が湧きました。学校の課題等もある中、活動の占める割合が大きく大変だったけれど、続けてきてよかったし、今後も続けようという気持ちが強まりました。

―今後の抱負をお聞かせください。

今は、日本にどのような仕事があるのかを本にして子ども達に配る案が出ています。将来について考える機会をもっともっと増やしたいですね。また、子ども達の中には今年、中学校に上がる子もいます。精神的な悩みも多い時期なので、身近な相談相手になれたらなと思っています。私達ボランティアもいずれは卒業してしまう。それまでに、より地域に根ざした活動を、地元の学生にも参加してもらいながら考えていきたいです。

NEW IDEA

「にしのみや学生ビジネスアイデアコンテスト」で《西宮商工会議所会頭賞を受賞》！

◉名塩和紙のよさをブックカバーにして伝える

西宮市等が主催する「にしのみや学生ビジネスアイデアコンテスト2017」で、大畑さんが提案した「名塩和紙でつくるブックカバー」が第２位にあたる西宮商工会議所会頭賞を受賞した。昨年で６回目を迎えたこのコンテストは、「大学のまち西宮」の特性を生かした産学官の取り組み。市内大学と産業界との連携、西宮というまちを学生が深く学び、その魅力を再発見できる絶好の機会として毎年開催されている。コンテストでは、書類審査を経て、ブラッシュアップセミナー、ブラッシュアップ個別アドバイスが行われ、２次審査のプレゼンテーションにより受賞者が決まる。その道のりや受賞の歓びなど、話を聞いた。

•人間科学部
心理・行動科学科3年生　大畑 さん

―応募のきっかけは？

このコンテストを企画運営しているNPO法人コミュニティ事業支援ネットでアルバイトをしており、少しでも貢献できればと思って応募しました。

私は旅行先でも染め物や機織り体験をするなど、もともと伝統工芸品に興味を持っていました。調べていくなかで、西宮の土や山水、雁皮を用いる和紙を発見し、これだ！と思ったんです（笑）。

手漉き和紙は一枚ずつ表情が違い、丈夫で長く使え、皮革のように使うほど味が出てきます。作っている人の温かさが感じられることも魅力でした。

―ブックカバーというアイデアはどこから来たのでしょう？

名塩和紙を見つけた瞬間、パッと浮かびました。本は持ち歩きます。和紙のブックカバーをつけた本を電車内で読めば、周りの人の目にも留まる。手軽だし、伝わりやすそうだと思い、すぐに製作元の谷徳製紙所へ見学を申し込みました。

話を伺うと、谷徳製紙所でも名塩和紙を現代にどう生かすのかを思案されていて、そのお手伝いにもなるのではと提案したところ、喜んでいただけました。

―どのようにして制作したのですか。

ブックカバーに適した和紙を２種類谷徳さんに選んでいただき、カッターで切って試作を作りました。一つは泥が入っている紙、もう一つは入っていない紙です。手触りが全然違い、泥入りの方がごつごつして柔らかいんですよ。文字は、活版印刷のワーキングスペースを利用して印字しました。最初からすごくいいものが出来たので、とても満足です。

名塩和紙の
ブックカバーとしおり

―企業やNPOの方からアドバイスをもらえるブラッシュアップセミナーはためになりましたか？

はい。セミナーでは、ターゲットを絞り、どのようなシーンで売るのか考えるよう言われました。アイデアを練って練って、辿り着いたのが母子手帳のブックカバー。大切に使って貰え、お母さんから子どもへと受け継がれる。名塩和紙の耐久性や、年月を経て風合いが出る点などぴったりだと思いました。

それから、「なぜ、ブックカバーなの？」「なぜ、和紙を選んだの？」と、次々に質問を投げかけてくださったので、自己分析が少しずつ習慣化され、経営者の目線を知ることもできました。

―受賞の感想は？

もの作りは好きですが、提案するにはパワーが必要。寝ていても考え、思いついたら起きてメモするという日々が続き、この2カ月間は本当に大変でした。でも、学生時代に頑張ったことの一つとして言える経験ができ、それが評価されて嬉しかったです。

アイデアを詰めていく上で、経営者の方や友達、疎遠になっていた人とも連絡を取り、人との繋がりの大切さを痛感しました。「温もりが感じられる商品を」と始めましたが、皆が私のために時間を割いてくれ、私も温かさを感じさせてもらったことが一番の収穫です。

―今回の受賞を誰に伝えたいですか。

高校時代の恩師に伝えたいです。お世話になった人に一緒に喜んで貰えたら嬉しいですね。そして、私が頑張ったことで後輩が本学をめざすきっかけになるなど、何か役に立つといいなと思います。

＜名塩和紙とは＞：泥土と雁皮を混ぜて漉く名塩和紙は、長い年月を経ても虫が付かず変色もせず、燃えにくいなどの特徴をもつ。そのため、古くから神社・仏閣・城館の襖紙として使用され、現在は二条城などの国宝や美術品、文化財などの保存修復に欠かせない貴重な存在である。江戸時代には「名塩千軒」と称された紙漉きの里も、今では２軒。全ての種類の名塩和紙を作っているのは谷徳製紙所のみとなった。

学生交流

◉オーストリア・モーツァルテウム音楽大学とのフレンドシップウィークを開催

表現する歓びを ～問い直す～

本学はオーストリア・ザルツブルクのモーツァルテウム音楽大学と協定を結び、様々な国際交流プログラムを実施している。今年度はフレンドシップウィークにヴァイオリンの教授と2名の学生が来訪。相互の交流を深めながら音楽を追求する姿勢を学ぶ貴重な機会となった。

●音楽学科・ピアノ
佐々 由佳里 教授

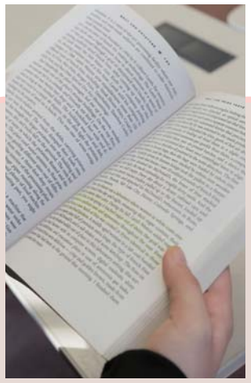
モーツァルテウム音楽大学は指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤンらを輩出した名門。音楽学科の佐々由佳里教授が留学した縁で交流が始まり、2013年3月に協定を締結した。モーツァルテウム夏期国際アカデミーに学生を推薦する海外研修助成金制度、フレンドシップウィーク、インターネットピアノレッスン、認定留学制度を軸にプログラムを展開している。

フレンドシップウィークは、マスタークラス、ワークショップ、学生交流コンサート、両校教員によるフレンドシップコンサートの4つを骨組みに実施。今年度は2017年10月29日から11月5日に、モーツァルテウム音楽大学よりハラルド・ヘルツル教授と同大学学生のムハンメジャン・シャリポフさん(ヴァイオリン)、ヨナサン・ポネさん(ヴィオラ)が来訪。本学より6名のヴァイオリン学生がマスタークラスを受講し、17名の弦・管楽器、ピアノ学生が室内楽ワークショップに参加。音大受験を目指す高校生のための公開レッスンも行われた。

「モーツァルテウム音大では、作曲家が五線譜にどんな思いを込めているのか、学生が自分で楽譜を読み取り音楽を探究していくことを強く求められます。技術的に難しい曲よりも、その学生の力量に合う曲を選び、1つ1つの音を大切に仕上げていくのです。また、欧州の学生は音楽史や歴史の中で音楽をとらえることに長けており、演奏で自分の解釈や主張をしっかり伝えてきます」と佐々教授。

その点はヘルツル教授も同じで、フレージングやテンポの持っていき方などを細かく指導。室内楽においては学生たちの意見交換を重視し、熱心にコミュニケーションを取る姿が見られた。また、高校生のための公開レッスンでは3名が受講し、スタート時と終了時で音色が別人のように変化。11月3日には音楽館ホールにて学生交流コンサートが開催され、サラサーテのザパティアード、モーツァルトのピアノ三重奏などの演奏で盛況のうちに幕を閉じた。

「モーツァルトの生誕地ザルツブルクは感性が磨かれる素敵な街。現地の先生からリアルタイムでピアノの指導が受けられるインターネットレッスンや、半年間現地で学ぶ認定留学など、視野を拡げて豊かに学べるいろいろなプログラムを用意しています。どんどんチャレンジしてください」と佐々教授は話している。



Fast Food Nation, Eric Schlosser
『ファストフードが世界を食いつくす』
エリック シュローサー(2001)
Mariner Books出版社

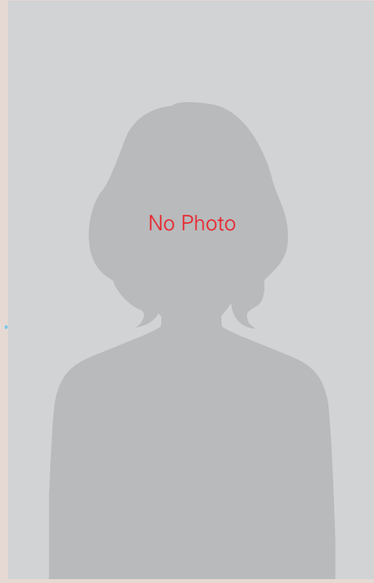
Congratulations on winning!

QUEST

「神戸女学院の100冊」書評コンテストで《優秀賞・学長特別賞を受賞》!

専門的関心を広げ、新たな知識欲を刺激する

昨年11月3日、「神戸女学院の100冊」書評コンテストの表彰式が行われ、グローバル・スタディーズ分野に応募した吉村さんが、優秀賞と学長特別賞を受賞した。
神戸女学院は、自分の専門とする分野以外の学びを深めるリベラルアーツ教育をより充実したものとするために、19分野の基本図書を「神戸女学院の100冊」として推薦している。昨年で3回目を迎えたこのコンテストは、100冊に指定されている基本図書から1冊を選び、内容をまとめ、書評を書くというもの。高校生部門67作品、大学生部門5作品の応募があり、高校生部門で最優秀賞2名、優秀賞2名、佳作2名、大学生部門で優秀賞・学長特別賞1名、佳作1名が選出された。



●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科1年生
吉村 さん

——応募のきっかけは?

実は、最初は賞品の図書カードが目当てでした(笑)。アルバイトに時間を割くより、勉強して図書カードを貰う方がいいと思ったんです。将来、英語は必ず役に立ちます。ちょうど実用英語技能検定も控えていたので、夏休みの間にリーディングとライティングの練習をしようと、敢えて洋書の『Fast Food Nation』を選び、書評も英語で書くことにしました。

——どのように進めていきましたか?

読みながら、気になったところや要点をパソコン上にまとめていきました。毎晩2、3時間かけて読み進め、1カ月と少し。それを最後に推敲しました。読んでも読んでもなかなか進まず、途中で心が折れそうになったこともありました。辞書に載っていないスラングなどの訳は、特に難しくて苦労しました。

——この本から何を学びましたか?

ファストフード大国であるアメリカの裏の部分について学びました。ファストフードが原因で命を落とす人がいること。高校生くらいの子ども達が長時間、低賃金で働いており、大きな責任も負わされていること。今まで全然知らなかった社会の側面が見えてきました。

——受賞の感想は?

自分の英語力が認められて嬉しかったです。書評応募後の10月に英検準1級を受けたのですが、ライティングで満点を取ることができ、書評を頑張って書いたことで実力が付いたのだと感じました。自信に繋がったことが何よりの成果ですね。

「神戸女学院の100冊」は、とても幅が広いです。もっといろいろな本を読んでみたいし、今回身に付いた英語力を生かしていくためにも、また応募しようかなと思っています。

——今後の抱負をお聞かせください。

2年生からは通訳・翻訳プログラムを受講したいと思っています。それから、音楽や心理学も勉強したい。やりたいこと、吸収したいことがいっぱいあるんです。

そもそも神戸女学院を受験しようと思ったのは、多様な分野の勉強ができるから。そして、自然に囲まれたこの環境を魅力に感じたからです。小さい頃から昆虫や生き物が大好きでしたし、英語を話せるようにもなりたかったので、環境・バイオサイエンス学科と英文学科のどちらにするか、ギリギリまで迷いましたけど。

——神戸女学院のリベラルアーツ教育は、多様な学びへの意欲を持つ吉村さんにぴったりですね。

はい。そして、昨夏に一日インターンシップを経験したことも大きかったです。一緒になった他大学の学生がとても博識で、「自分はまだまだだなぁ」と感じました。何か人と話をしていても、知識が無ければそこで止まってしまう。もっともっと幅広く、様々なことを吸収したいですね。

今は動物生態学が楽しくて、特に昆虫の性別多様性に興味を持っています。将来は研究職に就きたいなという思いもあり……。まだまだ絞りきれませんが、いろいろなことを知り尽くしたいです!

◉総合文化学科プロジェクト科目

「現地体験でしか見えないモノがある」

── <フィールドで学ぶ現代インドの諸問題> ──

総合文化学科の北川将之准教授は、2年生を対象として夏休み期間中に、インドでフィールドワークに取り組んでいる。福祉施設でのボランティア活動、ストリートチルドレンや貧困女性らとの交流を通じて、参加者は何を学び、何を感じ取っていくのか。学生たちの変化、大学でフィールドワークを行うことの意義などについて聞いた。

▼学びにはきっかけが必要

8年前からインドのバンガロールで体験型学習に取り組んでいます。訪問先は主に私が研究対象としている農村や民間の福祉施設、本学提携校など。現地の文化体験や日本企業のオフィス訪問なども行います。当初はゼミ活動でしたが、時間的な余裕のある2年生を対象にしようとプロジェクト科目に移行しました。

インドを選んだのは、私自身が大学院時代に農村でのホームステイを体験し、インドに対する見方が変わったからです。危険、汚いというイメージを持たれがちですが、慣れれば人はよく、同じアジアの中でも民主主義国として長い政治体制の実績がある。しかし、民族的にも宗教的にも複雑で多様性がある点においては日本と対局にあり、多くの学びを得ることができます。

科目の定員は16名。実習を行う時期は8月下旬から9月上旬です。4月のオリエンテーションでは現地で病気になった時や事故が起きた時の対応方法などを説明し、希望者への意思確認を行います。

事前学習と渡航前の集中講義では、文献資料や映像資料で訪問先に関する情報共有を行います。社会福祉の専門家である與那嶺司先生（総合文化学科教授）や外部講師の講義により、日本とインドの福祉環境の違いを学び、身体障害のある子どもたちとの接し方などアドバイスを受けます。基礎的理解を十分深めたうえで、現地で自分が何を知るためにどんな質問をするのかを考えます。

一人一冊ずつフィールドノートを作成。資料を整理し、感想や気付きをまとめるノートで、一年間の自分の変化を振り返ることができるようにするものです。効果的な学びを得るためには、綿密な準備と記録が欠かせません。学びにはきっかけが必要なのです。

▼生きる力を高める

実習での体験内容は、施設でボランティア活動をしたり、子どもたちと遊んだり、学生や成人と討論するなど様々です。2017年度は、11日間の渡航でストリートチルドレンの保護施設「BOSCO」や視覚障害児の養護施設、マザーテレサが設立した障害孤児のための施設「シシュバワン」、貧困女性がマイクロファイナンス活動を行う農村アネッカル、難民であるチベット人学生の寮などに訪問しました。

参加学生には留学経験のある人、高校時代にNGO活動を体験した人もいますが、インドの現状には衝撃を受けるようです。とりわけインパクトが強いのはシシュバワンでのボランティア活動です。重度の障害で親たちに見放された子どもたちをケアする施設で、私たちは掃除や洗濯などを手伝います。いちばん大変なのは食事の手伝いです。嚥下の問題がある子どもたちにスプーンで流動食を食べさせるのですが、一杯飲み込ませるだけで数分かかり、時には吐き出してしまいます。こうした作業をボランティアが支えるというのは日本では考えられないことですが、学生たちは子どもたちの頭を膝にのせた時に温かみを感じて、「この温かみが命なんだ」と実感するようです。

アネッカルでのマイクロファイナンス活動は私の研究対象でもあり、低カーストの女性たちと交流しています。マイクロファイナンスは自立するためにグループで少額融資を受けるシステムで、お金の使い道もグループで決めます。BOSCOはストリートチルドレンに職業訓練や教育を受ける機会を与える施設です。人々との交流にあたっては学生たちに観察の仕方を指導しています。最初は全体を観察し、次はこれはこうではないかと類推していくストーリー観察、最後は一つのものや一人の人に焦点を当てる焦点観察です。BOSCOでも、元気に遊んでいる集団の輪に入ることができない子どもを見つけ、側に寄り添ったという学生がいました。そうした気づきを大切にすることで他者へ共感する心が育まれていきます。

▼自分に足りないものが見えてくる

実習終了後はノートにまとめ、そのノートを基に事後学習で発表して討論。さらにいくつかのテーマに分けて内容を整理し、学内の報告会で発表します。発表にあたっては映像資料を交えてわかりやすくすることと、渡航前と渡航後の自分の変化を説明することを学生に求めています。こうしたフィールドワークを民間のスタディツアーではなく大学で行う意義は、記憶の新しいうちに肌身で感じたことや考えたことを記録して振り返り、仲間と議論しながら問い直すことにあると考えています。学生たちが現地で問いかける質問や、発表で出てくるキーワードは、「夢」「幸せとは何か」を問うものが多いですね。貧しい環境に置かれていてもインドの人たちは幸せを追求していて、アネッカルの女性たちは経済的収入を得ることが大事だと考えていますし、BOSCOの子どもたちも学校で勉強をしてあこがれの職業に就きたいと答えます。そんな子どもたちの姿を見て教育の大切さを認識し、教職を目指す学生や、マザーハウスで触発されて看護師の道を選んだ学生もいます。

また、彼らのハングリーな生き方からエネルギーをもらい、「自信を持って自分の意見を発表できるようになりたい」と言った学生もいました。混沌としたインドは自己主張をしないと埋もれてしまうような社会。恵まれた環境にいる学生たちが、自分より弱い立場にいると感じていた人たちが実は自分よりも強いと気づいた瞬間、それは尊敬のまなざしに変わり、自分に足りないものを探し始めるのです。そうした経験を多くの学生たちに積んでほしいと思います。

▼五感で得られる学びは大きい

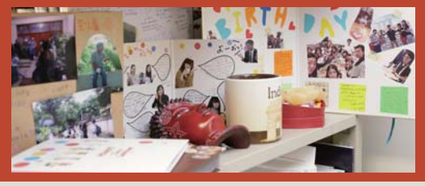
異文化を体感することによって、日本に対する見方も変わってくるでしょう。海外フィールドワークは改めて日本のよさを再認識する機会でもあります。日本とインド、両者を比較するような国際比較の視点を養ってほしいですね。特に教職をめざす学生には、ぜひこうしたフィールドワークに参加して欲しいと思います。座学だけでは実際の世界は見えてきません。五感で人間を知ることが最も大事だと思います。

今後は10年を一つの区切りとして、訪問先を限定して一つの対象を深く掘り下げることも検討したいと考えています。いずれにしても安全の確保に努めて充実した体験学習を行えるよう心がけます。

ストリートチルドレン保護施設

町の散策

貧困女性への聞き取り



フィールドスタディのアルバム▶

●総合文化学科
北川 将之 准教授

Field Study in INDIA

◉ 新院長に聞く――

日本最古の女子大学が向かう未来「NON SIBI」を身に纏う

●学校法人神戸女学院 新理事長・院長
飯 謙―― *Il Ken*

2018年3月31日、森孝一院長（理事長）の任期が満了となり、4月1日付けで総合文化学科の飯謙教授が新院長に就任した。2009年4月から2015年3月まで学長を務め、大学改革に尽力してきた実績を持つ飯新院長に、就任にあたっての想い、これからの教育の在り方と神戸女学院の個性などについて聞いた。

NON SIBI（ノン・スィビ）
※ ラテン語で、英語に直すと「not for self」、日本語では「自分のため、ではなく」
〈聖書〉：ローマの信徒への手紙15章1-2節（新約）
私たち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。

▼教職員全員で改革推進

本学は、米国伝道会から派遣された女性宣教師たちが開校した私塾「女學校（神戸ホーム）」を前身とする、日本最古の女性のための教育機関です。このたび新院長に就任し、初代校長のイライザ・タルカット先生をはじめ、敬愛する先生方と同じ重責を担わせていただくことに、大変身が引き締まる思いです。

私は1983年に本学に奉職し、1995年に文学部の教授となり、2009年4月から2015年3月まで学長を務めました。その折に、中長期計画として三つの柱を掲げました。それは英語教育の再編、リベラルアーツ教育の充実、自発的学修環境の整備です。具体的には、新カリキュラムとオリジナル教科書による英語教育、専攻分野以外の領域を体系的に学修する副専攻制度、図書館へのラーニングコモンズ開設などをあげることができます。

ただ、これらの取り組みは教育の道標を作っただけに過ぎません。実際によりよい方向へ深化させたのは、現場をよく知る教職員の皆さんです。幸い神戸女学院には伝統的に自由に意見を言い合える学風があり、全員参加の話し合いで重要な物事を決める体制が保たれてきました。これらの案も、研修会で学院の歴史を学び、教授会で議論を重ねる中で作り上げられたものです。これからも教職員の皆さんが互いの主体性を尊重し、異なる立場をも受け入れ合い、試行錯誤しながら本学の強みを生かせたら、と。新たなポジションで、少し離れた位置になりますが、神戸女学院らしい改革をご一緒したいと考えています。

▼真の教養を育むリベラルアーツ

神戸女学院教育の特色に、先に述べたリベラルアーツ教育があります。モデルとしたのは米国で作り上げられた教育システムで、多領域を学ぶ中で批判的な思考力を身につけ、それらを関係づけ、自発的・能動的な学修精神の涵養を目指します。そのプロセスを経て、自身の専門分野を定め、幅広い教養と質の高い判断力や決断力を備えた人格が陶冶される――全人教育ということです。神戸女学院は小さな大学ですが、人文系から社会科学、自然科学、さらに芸術系まですべての分野がそろっています。それを生かそうと、主専攻とは別に1分野を選択して深い知識や技能を突きつめられる副専攻制度を設けました。

また、学びの場は学内だけでなく学外にも広がっており、自治体やNPOと関わるプログラムにも積極的に参加しています。少子化が進む現在、若者が集う大学に対する地域の期待も高まっているので、地域との連携による教育もますます充実をと願っています。

▼他者を想う心を生きる原動力に

社会人になると様々な生き方がありますが、私自身は教育の目的を、どのような業界・職種であっても使命感と共感性を持って働ける人を送り出すことにあると考えています。自分の知識を肥大させるためではなく、他者へと開かれた意識を持つことによって、社会で生かせる本質的な力を磨くことができます。

「自由」という言葉は聖書に照らすと、個人の願望の実現と、他者の思いに応える応答という二つの焦点が折り合うような形で行動することを意味すると理解できます。そんな「自由」な、自発的な生き方をまさに体現したのが、本学の創始者であるタルカット先生でした。先生が来日されたのは、キリスト教禁止の高礼が撤去されて間もない1873年3月。まだ女性が教育を受ける機会の少なかった時代です。地域の人たちから娘たちへの教育の場づくりを請われたことがきっかけとなり、その年の秋に神戸ホームの前身となる私塾を開設しました。タルカット先生たち宣教師の間では「NON SIBI」というラテン語が合言葉だったといいます。SIBIは英語のself にあたり、「自分のために、ではなく」という意味。私利私欲ではなく使命感を持って女子高等教育の場を開いたことが窺えます。

自分のためではなく、他者にどう奉仕するかを追求することからモチベーションを作り出していく生き方。まさにそれは永久標語「愛神愛隣」の意味するところです。そんなメンタリティの中でできあがった神戸女学院のDNAを広めていくことに、本学院建学の祈りがあります。

▼人生の岐路に立ち返る原点

また、卒業生が人生の岐路にさしかかった時に立ち返る原点たり得る学校でありたいと考えています。本学名誉教授の内田樹先生から、こんなエピソードを伺ったことがあります。週日の午後、図書館本館にいたら、階上のギャラリーから卒業生が声をかけてきた。「何をしているのか」と問うと、「転職を迷っている。学生時代にいちばん好きだった図書館でならば利害を超えて考えることができるのではないか、自分が本当にやりたいことがわかるような気がしてキャンパスを訪れた」と。学校というのは、そういうはたらきができる場所。卒業生へも、何か決断をしようとした時、後押しのできる、モチベーションの源となれる学び舎の原型をとどめる義務があります。

私自身、今後も教員として教壇に立ち、「愛神愛隣」の根底に流れるものを伝え、深めてまいりたく思います。

■飯 謙（いい・けん）
学校法人神戸女学院理事長・院長。同志社大学神学部、同大学院博士前・後期課程、バーゼル大学神学部に学ぶ。専攻は旧約聖書学。博士（神学）。1983年に神戸女学院大学助手となり、講師、助教授を経て1995年文学部教授。チャプレン、学生部長、そして学長を歴任。

KC INFORMATION

講演会・公開講座・コンサートなど

音楽学部講演会・公演

●第25回サマーコンサート
日　時：6月26日(火)18:30開演
場　所：豊中市立文化芸術センター 大ホール
参加費用：前売り 500円　当日 600円

●オータムコンサート
日　時：10月4日(木)18:30開演予定
場　所：宝塚ベガ・ホール
参加費用：無料

問い合わせ：音楽学部事務室　TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551　E-mail:music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

●子どものための七夕コンサート 第50回
～5色の短冊に願いを～みんなで奏でる夢のメロディー～
日　時：7月7日(土)
第1部：11:00～12:00(10:15開場) 年齢制限なし
第2部：15:00～16:00(14:30開場) 小学生以上対象
場　所：神戸女学院講堂
出　演：「音楽によるアウトリーチ」履修生
参加費用：大人500円、子ども(19歳以下)300円　申込み要

●音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ 第9回
日　時：9月15日(土)9:30～16:00
場　所：神戸女学院大学音楽館ホール
講　師：英国ロンドン市立ギルドホール音楽院リーダーシップ専攻修了生
参加費用：無料　申込み要(対象：小学生・中学生・高校生 先着40名)
※詳しくはアウトリーチセンターのホームページをご覧ください

●子どものためのスペシャル・コンサート 第51回 ～ハープの魅力を満喫しよう！～
日　時：10月13日(土)14時開演 (13:15開場)
場　所：神戸女学院講堂
出　演：木村 茉莉(ハーピスト、音楽学部非常勤講師)
寺澤 彩(ハーピスト、音楽学部非常勤講師)
岩本 紗綾(大学院音楽研究科生)
参加費用：大人1000円、子ども(3～19歳以下)500円
申込み要(対象：3歳以上)

問い合わせ：音楽学部アウトリーチ・センター　TEL 0798-51-8584
E-mail:concertfch@mail.kobe-c.ac.jp

心理相談室ウィーク

●無料相談 (要予約)
日　時：7月30日(月)～8月3日(金)10:00～17:00 (土日除く)
場　所：神戸女学院大学心理相談室
申込期間：7月2日(月)～7月13日(金)10:00～18:00 (土日除く)
※在学中の方及びその保護者の方のお申し込みはできません。

●講演会 (予約不要)
演　題：心理学的に根づくということ ～バウムテスト研究から学んだこと～
日　時：8月1日(水)13:00～15:00
場　所：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館2階201室
講　師：鶴田 英也(神戸女学院大学人間科学部准教授)

問い合わせ：神戸女学院大学大学院心理相談室　TEL 0798-51-8554

金曜日公開プログラム

●研究所主催講演会
日　時：6月29日(金)10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂

●オルガンコンサート
日　時：7月6日(金)10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
出　演：片桐 聖子(学院オルガニスト)、前田 直子(学院オルガニスト)

●礼拝
日　時：7月27日(金)10:35～11:25
場　所：神戸女学院ソールチャペル
説　教：中野 敬一(学院チャプレン)

●後期始業礼拝
日　時：9月28日(金)10:35～11:25
場　所：神戸女学院ソールチャペル
説　教：中野 敬一(学院チャプレン)

●派遣留学生帰国報告会
日　時：10月5日(金)10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
説　教：国際交流センター

問い合わせ：チャプレン室　TEL 0798-51-8502

高校生等参加イベント

●オープンキャンパス
日　時：6月17日(日)/7月29日(日)/8月4日(土)/8月5日(日)
9月17日(月・祝) 10:00～15:00
内　容：模擬講義、キャンパスツアー、各種相談コーナー 他

問い合わせ：入学センター　TEL 0798-51-8543

●第9回絵本翻訳コンクール
参加申込締切：8月8日(水)
※申込受付後、課題図書をお送りします。詳しくは本学ホームページをご覧ください。

問い合わせ：学長室(広報)　TEL 0798-51-8585

●音楽学部夏期講習会 (要申込み、詳細は音楽学部ホームページをご確認ください)
日　時：[音楽] 7月28日(土)～7月31日(火) ※受講資格：中学生・高校生
[舞踊] 7月28日(土)、7月29日(日)
※受講資格：中学3年生以上、高校3年生優先30名まで
場　所：神戸女学院大学音楽館
参加費用：無料

問い合わせ：音楽学部事務室　TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551　E-mail:music@mail.kobe-c.ac.jp

●サイエンス体験
日　時：第1回 8月6日(月)/第2回 8月25日(土)
場　所：理学館またはメアリー・アンナ・ホルブルック記念館
参加費用：無料・申込み要(対象：高校生・予備校生等の女子、保護者、教員)

●ラボ見学ツアー ～理学館体験～
日　時：6月17日(日)/7月29日(日)/9月17日(月・祝)
場　所：理学館 S-24教室
参加費用：無料・申込み不要(対象：高校生・予備校生等の女子、保護者、教員)

●第13回 高等学校教員対象 環境・バイオサイエンス実験講座
日　時：8月4日(土)
場　所：理学館またはメアリー・アンナ・ホルブルック記念館
参加費用：無料・申込み要(対象：高等学校・中学校の理科担当教員)

問い合わせ：人間科学部事務室　TEL 0798-51-8553
FAX 0798-51-8560　E-mail:taiken@mail.kobe-c.ac.jp

●マイクロスケール実験で水溶液の酸性・中性・アルカリ性・電気伝導性を調べよう
※平成30年度「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」(研究成果の社会還元・普及事業)採択プログラム
日　時：9月1日(土)
場　所：理学館 S-28実験室
参加費用：無料・申込み要(対象：小学校5・6年生)

問い合わせ：人間科学部事務室　TEL 0798-51-8553
FAX 0798-51-8560　E-mail:jin-jim@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

2018めぐみ公開講座

●2018めぐみ講演会
「好きな事で生きる ～植物に支えられて～」
日　時：6月29日(金)13:30～15:00
講　師：兵庫県立淡路景観園芸学校、兵庫県立大学大学院
緑環境景観マネジメント研究科准教授　田淵 美也子 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

「スポーツによる健康なまちづくり」
日　時：10月20日(土)13:30～15:00
講　師：大阪ガス株式会社、北京五輪メダリスト　朝原 宣治 氏
会　場：神戸女学院講堂
受講料：一般1,500円　学生1,000円 ※要予約(Webからも可)

●2018アートセミナー
「スペインとイタリアのバロック美術 (全2回)」
第1回 6月18日(月)/第2回 7月2日(月)　10:30～12:00
講　師：大阪大学文学研究科教授、神戸女学院大学文学部非常勤講師　岡田 裕成 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

「古典倶楽部 ～テーマに沿って高校の教科書を読み直す～
受領の女(むすめ)たち (全3回)」
第1回 9月28日(金)/第2回 10月24日(水)/第3回 11月30日(金)
13:30～15:00
講　師：神戸女学院中高部非常勤講師　錦田 靖子 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

問い合わせ・申し込み：公益社団法人神戸女学院めぐみ会
TEL 0798-51-3545　URL:https://megumikai.or.jp/

・「Vistas」アンケートのお願い・
神戸女学院大学広報誌「Vistas」をご覧いただきありがとうございました。
P.17～18にアンケートハガキがございますので、皆様からのご意見・ご要望等をお寄せください。

※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。

● 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1／E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
● 表紙解説：文学館前で談笑する英文学科グローバル・スタディーズコースに所属する3名の専任教員(本編に記事掲載)

●神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1
●E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp　http://www.kobe-c.ac.jp/
神戸女学院大学